

シネマテーク『一瞬の夢』議事録

開催日：2018年7月29日

参加者（発言順）：楫野、植田、伊東、仙元、宮下、森内

K：ずっと以前に見たことがあるのですが、現在第一線で活躍している監督の処女作で、低予算ということで自主映画的でもあり、語り口がいろいろあるのではないかと思います。

U：僕も前に見たことがあるのですが、見るたびに好きになっていく映画です。お話はとてもシンプルなのですね。

I：フィルターが1枚かかっているような、カメラは接写しているのに、遠くに感じるというか。ジャ・ジャンクー監督特有の距離のとりかたです。歌や踊りがたくさん出てくるというのも、この監督の初期の特徴ですが、この映画ではそれが凝縮されていました。

S：青春を描いているのですが、映画そのものが青春というか、そのせつなさや痛みを感じました。初めて見ましたが、とても好きな作品です。役者は素人ですか。

M：そうだと思います。

K：『プラットホーム』と主役は同じですね。

S：その役者の魅力、そしてロケーションの強さもあった。物語はカチッとしている。古典的ともいえるくらいですが、表現されたものはとても初々しいのです。そうですか、処女作なのですね。

M：僕は前に見たことがあるのですが、たとえば『プラットホーム』と比べると、いい意味で無駄が多いというか、言葉に還元されないものがある。カットの内容やタイミングなど、監督が一人信じているものが余さず描かれていたと思います。『プラットホーム』もぜひ見ていただきたい映画です。

また距離感ということかというと、狭いところで撮影されているにもかかわらず、その先のこと

が描かれている。被写体が後ろ向きにもかかわらず、その表情がわかる。テレビや窓などがこの機能を果たしていると思います。この辺りはとても意図的にされていると思います。それに主人公がいいですね。周りの状況との関係の深刻さも好きでした。

K：主人公は抜群にいいですね。あれは役者にはできない。

M：何ともいえないふてぶてしさ。

S：いわゆる社会的な監督なのですか？

M：そういうものが写り込んでくるのだと思います。

I：その場で起きたことを取り込んでいったのでしょう。どうやら実際に起きているらしいことも描かれていました。

K：国内では上映禁止になったそうです。ジャ・ジャンクー監督はインタビューで「外から見た中国を描こうとしている」と言っていたことがあります。

A：海外での評価はどうだったのですか。

M：とても高かったと思います。2000年前後はジャ・ジャンクーの世界的評価は比肩できないものがあったと思います。

K：スケール感があるのに、かわいらしいというか、主人公に寄り添える、親しめる、そういったことが私たちの間で人気が高かった。主人公の心情がわかるんです。

I：原題は「小武」。主人公の名前です。「小」は卑下している意味合いがあります。旧友と背比べをした痕とか象徴的ですね。これもひょっとすると距離感につながるのかもしれない。直接的に描かないという点で。

S：とても不思議なんです、主人公の住まいは一切描かれないのですね。日常が描かれるのはかろうじて銭湯くらい。

I：あの銭湯の汚いこと。

S：とても体がきれいになるとは思えない。でも苦手な歌を一生懸命に練習するなんていうのはいいですね。

K：ジャ・ジャンクーといえばカメラだとか役者の動きだとか、そういうテクニカルなところに目を向けがちでしたが、改めて見直して、普通に感動しました。

A：僕はダメでした。主人公がどうしても・・・。

M：そうですか。

K：とてもキュートでしたけどね。あとラストがよかったですね。あの群衆は仕込みでしょう。

I：何人かはそうでしょうけど。街頭でのインタビューなんかもありましたが、あれもリアルですね。

K：あの群衆の表情はすごい。

A：テレビとかラジオは何なのでしょう。

I：ジャ・ジャンクー監督の作品にはよく出てきますね。外の世界・現実の世界が入り込んでくるといえるのでしょうか。

K：ジャ・ジャンクー監督にはドキュメンタリーの素地があったようです。

A：外部の音がやや饒舌的だとは思いましたね。

M：女の子が蛇口に口をつけて水を出すシーンがありましたが、どうもあのシーンがよくわからない。

K：人に寄っていますね。

S：きちんとアクションつなぎをしている。

M：完全に彼女だけのシーンなのです。

U：状況が変わっていく、それは止められない。その中での無力感。素晴らしい邦題だと思います。

A：どうやら今回は僕だけみなさんと違ってネガティブな感想を抱いてしまいましたが、異論があるほうがディスカッションは盛り上がるということで、ご容赦いただきたいと思います。